太田市立太田小学校　校長室から　８号　平成30年１０月２５日（木）

「養身有為」

丈夫な体をつくり、常に勉学を怠らず、
世のため人のために役立つ、実行力のある人になろう

「子どもから学んだ『命』の大切さと人間の『優しさ』･･･」

先日、校区内に住むある犬の飼い主の方から、「犬に石を投げた子がいる」と電話がかかってきました。私は、まさか、太田小の子どがそんなことをするのかと、耳を疑いました。犬が何をしたか分かりませんが、「命」ある犬に石を投げた子どもが、どんな気持ちで、あの堅い石を投げたのか･･･。幸い、命中していなかったみたいですが、もし、犬に命中していたら･･･と、いろいろ考えてしまいました。

だいぶ前の事ですが、寒い時期が来ると、思い出すことがあります。

それは、私がまだ若い担任だった頃、一年生を教えたときの二人の女の子のことです。クラスのある子が、街で買ってきたヒヨコを育ててほしいと学校に連れてきました。ピーちゃんと名前をつけ、初めのうちは、連れてきた子どもも、周囲の子どもも、とても可愛がっていましたが、ヒヨコの目つきが鋭くなり、黄色いふわふわな羽毛が白く硬くなるにつれて、ほとんどの子どもの意識からピーちゃんは遠ざかっていきました。でも、二人の女の子だけは、エサやりから水換え、鳥カゴの中の掃除と･･･毎日一生懸命に世話をし、愛情を注いでいました。

ところが、ある寒い朝、ピーちゃんが鳥カゴの中で冷たくなっていたのです。二人の落胆は大きく、その日の午前中、ずっとしょんぼりしていました。私は、二人を呼び、しっかりと思い出を語らせ、そして、これまでの努力をほめ、土に返すために校庭の片隅の穴に埋めるように言いました。二人が行った後、今度はクラスの子どもたちを集め、二人が語ったピーちゃんとの思い出を話しました。そろそろ、ピーちゃんを埋め終わり、手を合わせている頃だなと思い、子どもたちとともに校庭の片隅に駆けつけました。

二人はまだ、たくさんの落ち葉の上に、少しずつ土をかけているところでした。目にいっぱい涙を浮かべ、「先生、穴にピーちゃんを入れたけど、顔に土をかけられなかった。だから、落ち葉を一枚一枚かけてやった」と･･･。そんな二人の言葉に、私は、ただうなずくしかできませんでした。その後、全員で、落ち葉に包まれたピーちゃんに土をかけ、手を合わせました。

その日の彼女たちの日記には、「みんなが来てくれて嬉しかった。ピーちゃんをみんなが思っていてくれて嬉しかった」と書かれてありました。

亡くなったヒヨコの顔に土をかけられなかったという気持ちは、本来、私たち人間みんながもっている優しさだと思います。この日を境に、寒い季節になると心優しい二人の一年生のことを鮮明に思い出すのです。

冒頭に書いた、犬に石を投げた悲しい出来事。そして、亡くなったヒヨコの顔に土をかけられなかった心優しい二人の一年生。両者の行いを考えると、「『優しさ』を教えることの難しさ」を考えさせられます。

人権を疎かにしたり、「命」を粗末にしたりすることが後を絶たない現在。
私たち大人は、最も基本である「命」あるものを大切にするということを、目の前にいる子どもたちの成長(発達段階)に合った方法で指導していく使命と、何より自分自身がその実践しなければならないということを感じた出来事でした。

【お詫び】

本誌「養身有為」の発行号の記載がずれてしまったことをお詫びいたします。正しくは、以下のとおりです。「１号　創刊号9.4」「２号　始業式での話9.5」「３号　子どもたちの生命を守ること9.10」「４号　ある電車内での出来事9.13」「５号　食欲の秋　おいしい給食いただきます9.27」「６号　太田小『ふれあいパトロール隊』」を結成しました10.3」「７号　あいさつの話10.18」「８号　「子どもから学んだ『命』の大切さと人間の『優しさ』」